

大会運営面・技術面への提案

神奈川県トライアスロン連合 猪俣 位 (イノマタ タダシ)

この度は、第1種審判員としての推薦をいただきありがとうございます。

今回は、天候不順時のレース対応法および最近増加傾向にある同伴フィニッシュについて私見を述べたいと思う。昨年の日産大会での実例で、悪天候の為にスイム競技が一般の部で中止になり、デュアスロンに変更になった。過去にもデュアスロンに変更になったことがあるが、その際にはデュアスロンを想定しておらず、当日スムーズな種目変更が成し得なかった苦い経験がある。

今回は、悪天候を想定して事前に第一ランの企画を考え、技術代表と相談し、一般の部3km（折り返しての1周1.5kmのコースを2周回）の距離とし、スプリントの部は1周回の1.5kmとした。大会前日に片道750mの距離を測り、折り返し地点の準備をしておいた。当日、第三レースとなる一般の部の開始前より風が強まった為、スイム会場の波高が1m近くになり、一般の部はデュアスロンに変更する事になった。私の考えでは3kmの距離で選手を分散させ、トランジション入口付近で選手が交錯するのを防ぐ事を目論んでいたが、計測担当者から提案があり、一人ずつ5秒間隔でスタートさせ、欠席者1名の所では5秒空け、1周回で第一ランを終える方法を採用する事にした。

一斉スタートを前提にした場合、ある程度の距離の第一ランを設けないと、選手の集団化は避け得ないが、時間差スタート法では、バイクパートに移る時も混乱なくほど良く選手も分散させる事が出来、大会が成功裡に終わった。トライアスロンの大目玉であるスタート時の迫力はなくなるが、今回の様な悪天候時の安全なレース運営を優先する場合は、時間差スタート法は好都合であったので、今回の方式をKTU方式として、マニュアル作成を提案したいと思う。

毎年コースは違うが、デュアスロンに変更した時のスタート位置と距離は一般の部で1.5km、スプリントの部では750m地点で折り返しを作り、ラン担当の実行委員は前日に大会実行委員長・技術代表と相談してコース決定と、距離の計測をしておき、当日は一斉スタートはせずタイム差スタートを行えば、選手の混乱もなくなり、運営面・技術面でもコントロールしやすくなるので、非常に良い方法だと思う。日産大会に限らず他の大会でも利用出来ると思っている。例えばプールを使う大会でも、プールが使えなくなった時、オリンピックディスタンスの大会なら第一ランの方法として応用でき、技術面でも、ラン先導の審判と折り返しの審判、途中ショートカットする様な場所があれば、その場所に審判を配置すれば問題なく競技は遂行出来る。水泳担当の実

行委員と審判が第一ランの応援担当に当たれば十分に人材確保も可能になり、水泳担当のボランティアの方が定点に配置出来ればより一層充実した大会が行えると確信する。最近トライアスロン初心者の参加数が増加する傾向にある為、スイム、バイクともに事故は選手が集団化した際に起こりやすくなると考えている。初めてトライアスロンに参加する選手が大半を占めるような大会では、最初から先程上記した一人ずつの時間差スタートをスイムスタートで採用しても良いかと思う。昨年第1回大会を開催した横浜シーサイドトライアスロン大会では、トライアスロン初参加者が50%を超え、スイムスタート地点は傾斜もきつく、滑りやすかった状況から200人を超える一斉スタートはやめ、1ウェーブの選手数を50人程度に留め、多ウェーブ方式とした。スタータ、記録集計者等に負荷がかかったが、スタート直後の混乱は全くなく、全員が無事スイムフィニッシュできた点は評価できると思われる。

次に同伴フィニッシュについて述べたい。トライアスロンのイメージとしてロングでの大会のフィニッシュフィッシュの場面で家族や友達、チームの仲間での同伴フィニッシュの様子が映像や、写真で取り上げられているので、選手の中にはトライアスロンは同伴フィニッシュが当然だと思う方も多いのではないかと考えられる。同伴フィニッシュ禁止の大会でも、何人かの選手の方が子供と手をつなぎフィニッシュしたり、赤ちゃんを抱っこしてのフィニッシュや、家族との大人数で盛り上がりながらのフィニッシュする場面を何度も見てきた。

ここで提案であるが、トライアスロン大会のフィニッシュはすべて同伴フィニッシュしても良いとしてはどうか？これまで東扇島大会や日産大会では、リレー部門に限り同伴フィニッシュを許可してきたが、すべてに平等と言う考えからすれば、すべてのカテゴリーで同伴フィニッシュを許可したら良いのではと思う。今までは、リレー部門での参加選手だけの同伴フィニッシュでは、同伴フィニッシュゾーンを作り、そこからのフィニッシュを許可してきたので、大きな混乱はなかった。しかし、すべてに同伴フィニッシュを認めた場合、混乱がおこるが十分考えられる。フィニッシュ審判部での対応はどのようにすれば混乱なくスムーズにフィニッシュ出来るか考えてみると、フィニッシュを2つのゾーンに別け、同伴フィニッシュする選手としない選手をコントロールする事を提案したい。同伴フィニッシュする選手や家族はフィニッシュでの写真なり映像がほしいと思われるので、計測上のフィニッシュの後に写真撮影出来るフィニッシュゲートを作成すると良いと思われる。

以上の事を遂行する為には審判部の人数を確保する事、一旦同伴フィニッシュゾーンに入ったら、追い抜き禁止とする事、フィニッシュゾーンをフェンスなどできちんと2つに別け、フィニッシュ後の混乱を少なくする為の動線を確保する事が重要だと思う。

また、選手の安全のみならず、同伴フィニッシュする家族の安全確保も考慮すべきで

ある。特に子供を抱っこしてフィニッシュした際に、転倒して事故につながるなどと言った事が考えられるので、子供を抱っこしてのフィニッシュを禁止とすれば、同伴フィッシュ OK の大会が可能になるのでは？家族や友人と共にトライアスロンを謳歌する為にこの提案を推進したいと思う。

審判技術向上への提案

審判技術を向上する為には経験を積む事が一番と思うが、仕事の都合や、様々な私用により、その機会が少ない方も多いためと考えられ、早く技術向上をするには第一に経験豊富な審判の方と共に大会審判実務をこなすことが肝心かと考えられる。次にどの様に大会審判業務をしたかマーシャルレポートを作成して、客観的に自己の分析が出来ることが大事であり、また審判仲間への思いやりが大切である。誰かが見ていてくれる、誰かが気に留めていてくれると思えば、審判業務への楽しさが増してきますし、審判業務の中でのトライアスロンを謳歌出来るのではと思う。一つにレポート提出された審判員へのコメントを技術代表や技術委員、その大会の審判長、がする。経験していない大会での共有事項を連絡する。勉強会（トライアスロングッズの最新作やこれから主流になるであろう物など）を企画する etc など。

審判業務の楽しさ（仲間とのコミュニケーション）などが共有できれば、技術向上へつながって行くと考えられる。審判業務でのトライアスロンを謳歌出来れば、それが選手に還元でき、選手もトライアスロンを謳歌するという事につながって行くと思われ、審判員自身のモチベーションを高め、大会を支える一員として行動出来れば、自然と技術向上へとつながってくると考えられる。以上の事により技術代表、技術委員は思いやりの精神を持って経験を共有できるように配慮すべきであると思われる。

私自身トライアスロンは非常に楽しいスポーツであり、これからもいろいろな形で携わって行きたいと思っており、宜しく願いしたい。